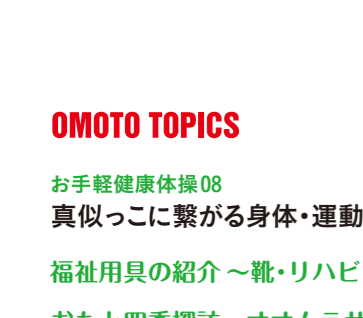


今後予想される感染症 おもと会はどう対策しているのか

感染管理認定看護師のお仕事



OMOTO TOPICS

お手軽健康体操08
真似っこに繋がる身体・運動・遊び

福祉用具の紹介～靴・リハビリシューズ～

おもと四季探訪 オオムラサキシキブ



すこやかな社会をつくる
- Create a Better Life -



医療法人 | 社会福祉法人 | 学校法人

おもと会グループ



医療



保健



介護・福祉



教育

那覇地区

おもと天久の杜

大浜第一病院

- 急性期一般病棟
- 回復期リハビリ病棟
- 救急センター
- 心臓血管センター
- 透析センター
- 内視鏡センター
- 糖尿病センター
- 女性腹腔鏡センター
- 代謝外科センター
- 総合健康管理センター
- 訪問リハビリ
- デイケア

特別養護老人ホーム おもと園

- 入所
- 短期入所
- あめくふれあいセンター
- おもと会
教育研修センター

在宅総合ケアセンター なは

- 居宅介護支援
- 訪問看護
- ホームヘルプサービス
- 訪問入浴サービス
- 那覇市地域包括
支援センター安里
- 那覇市地域包括
支援センター安謝

地域包括ケアセンター かみはら

- 特定施設
入居者生活介護
- 居宅介護支援
- デイサービス
- 訪問看護
- グループホーム
- 小規模多機能ホーム

ケア・クロッシング 寄宮

- 小規模多機能ホーム
- ホームヘルプサービス
- 福祉用具
- 研修センター CC 寄宮
- NO LIFT® LABO
- LOUNGE O

クリニック安里

- 外来診療・訪問診療
- パワーリハビリおもと
- 訪問リハビリ

豊見城地区 / おもとよみの杜

大浜第二病院

- 回復期リハビリ病棟
- 訪問診療
- 医療療養型病棟
- 訪問リハビリ
- デイケア

介護老人保健施設 はまゆう

- 入所
- 短期入所
- デイケア

特別養護老人ホーム すみれ

- 入所
- 短期入所
- デイサービス
- 福祉用具
- 介護予防
おもとふれあいセンター

在宅総合ケアセンター おもとよみの杜

- 居宅介護支援
- デイサービス
- ホームヘルプサービス
- 訪問看護
- 豊見城市地域包括
支援センターとよみの杜

ケアハウスひまわり

- 軽費老人ホーム

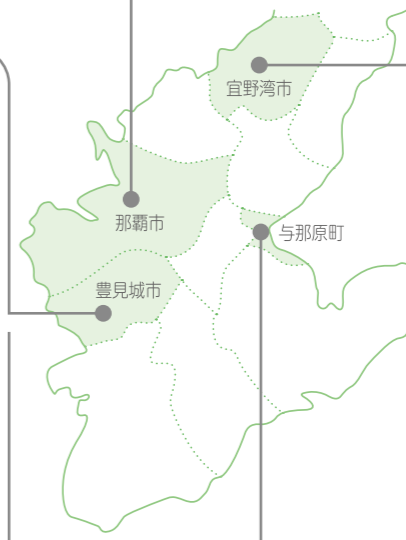
宜野湾地区

介護老人保健施設 ぎのわんおもと園

- 入所
- 短期入所
- 居宅介護支援
- デイケア
- グループホーム
- 小規模多機能ホーム
- 介護予防
- 訪問リハビリ

デイサービスセンター 上原

- デイサービス



与那原地区

沖縄看護専門学校

沖縄リハビリテーション福祉学院

今後も予想される感染症 おもと会はどうか探ってみましょう

猛威をふるった新型コロナウイルスは多くの犠牲者を出し
感染対策がいかに大切かを世界中に知らしめました
おもと会の体制はどうなっているのか聞いてみました



藤田次郎特別顧問の専門領域は感染症・呼吸器内科です。コロナでは早期診断早期治療が結局感染の拡大を防ぐことがわかったと藤田特別顧問。こうした経験は今後の感染対策にも役立ちそうです。

コロナのおかげで進歩
した面もあるんだよ



コロナ禍もひと段落した印象ですが、2020年から23年前半まではこの感染症で世界がパニックに陥っていたことが今も記憶に残っています。

おもと会グループの各病院、各事業所も当然感染対策に追われました。
ただ、患者さんや入所・利用者さん、そして職員をコロナの脅威から守るためにペストを尽くし、被害は比較的低く抑えられたと自負しています。
これを可能にしたのは、充実した感染対策です。
それはどのようなものか、紹介してみます。

20年前からの認定看護師養成はまさに先見の明

藤田次郎医師は琉球大学医学部第一内科の教授を17年、その間琉球大学病院の感染対策室長、さらに病院長も務めました。現在おもと会で特別顧問を務めるとともに、大浜第一病院呼吸器内科で診察も担当しています。

「おもと会の感染対策のキーマンは感染管理認定看護師ともいえます。沖縄におけるその養成は約20年前に私たちが始めました」といいます。
感染管理認定看護師の役割は簡単にいえば「病院の職員や患者さんを感染から守ること」

疫学・微生物学・感染症学などの専門的知識をベースに、個々の施設にマッチした効果的な感染対策マニュアルを作り上げ、それを実施していきますが、それだけにこの認定看護師になるのは大変です。
「昔は養成も東京や大阪などの大都市でしかできませんでした。沖縄の看護師が認定を取るには最低半年間仕事を休んで本土へ行き、研修を受けなくてはならなかったのです」

それでは将来の感染対策に支障をきたし、沖縄はそのジャンルで全国に遅れを取りかねないと危機感を抱いた藤田特別顧問らは、県看護協会とも共同で、沖縄で感染管理認定看護師を養成する取り組みを始めます。

藤田次郎特別顧問

「私も教えに行きましたよ」と振り返ります。実は、この取り組みがおもと会における感染対策に大きく貢献しました。
感染管理認定看護師は大学病院クラスでも3人程度しかいませんが、おもと会グループには現在8名が在籍しています。

つまり、これらの認定看護師が医療や介護の現場での感染対策を充実させているといえるのです。
今回のコロナ禍でも感染管理認定看護師が活躍しました。それを考えると、藤田特別顧問らの20年前からの取り組みには先見の明があったといえます。

「施設内で感染を100%防ぐことは困難です。おもと会グループでもクラスターが何度かありました。問題は感染者の治療をどれだけ早く始められるかであり、その治療の段階で感染管理認定看護師が活躍しました。結果として感染拡大をある程度防ぐことができたのです」

もうひとつ、組織体制の整備も感染対策充実の背景に

コロナ禍の発生当初は、COVID検査も行政検査でしか対応できず、治療薬もワクチンもない状況でした。

後に検査や治療薬、ワクチンの開発など進んでいきましたが、日々情報は更新され、イレギュラーな事態に遭遇することも多々発生しました。現場スタッフは、通常業務とは異なるコロナ診療対応に追われ、混乱が避けられない状況でした。

未曾有のこの事態に・・・自分に来ることは何か日々自問自答の毎日でした。とにかく、現場の混乱を少しでも落ち着かせ、患者様へいち早く診療・治療（薬剤投与）提供に繋がるために・・・この思いで、必死になって、現場と行政と患者様との調整役や間接的業務に尽力しました。

また、藤田特別顧問の患者様を想う信念（コロナにおいてはいち早い治療が必要で、薬も迅速に投与しなくてはならない）においても賛同し、行動原理に至った次第です」

大浜第一病院

感染症を院内に持ち込まないことが第一

さて、感染管理対策室の日常的な役割としては、第一に感染症を院外から持ち込まないことだそうです。

コロナだけでなくインフルエンザや結核、麻疹など、病院外で発生する数多くの感染症を院内に持ち込まないように、そして入院している患者さんに感染させないことです。
また、耐性菌対策も重要です。MRSAなどの薬剤耐性を有する細菌が院内感染を引き起こしてしまうのは非常に大きな脅威となってしまうからです。

そうした感染を防ぐための職員教育や指導・啓発活動も含めて行っています。

大浜第一病院は、急性期病院として侵襲性の高い医療行為も多く行います。例えば手術やカテーテル挿入といったものです。

その医療行為そのものは、人の体内に侵入、接触する行為なので、必然的に感染リスクも伴ってきます。

「注射ひとつ、点滴ひとつにしても感染リスクになるのです」
安全な医療の質のアウトカム評価は、事故を起こさないことと、感染を発生させないことだと思っています。感染管理認定看護師の務めとして、全ての医療行為において感染防止のための最新の知見と技術を情報提供し、職員一人ひとりが確実に実践できるよう『啓発し続けていくこと』そこが重要だと考えています。

伊藤看護師は、大浜第一病院で今後も引き続き感染管理認定看護師を育成したいといっています。
「院外での感染管理認定看護師研修というのは院内の者から見るとわりとハードルの高いものです。そこまずは院内で感染管理認定看護師を育て、ある程度自信がついた人を外の研修に出していく。そのようにステップを踏む形で、なるべく尻込みさせないように、職員に対して新たな道が開けるように、院内で育てていきたいと考えています」

実はコロナ前に、院内における感染管理認定看護師育成制度を立ち上げたのが伊藤看護師だったそうです。



伊藤まゆみさんは、パイオニア的な感染管理認定看護師で、今は自ら認定看護師を育成する立場です。

コロナと戦い認定看護師も育てた

前述のように大浜第一、第二病院それぞれに感染管理対策室があつて、各病院の感染対策にあたっています。

大浜第一病院の感染管理対策室室長代理を務める伊藤まゆみさんは、藤田医師が20年ほど前に養成を始めたところに研修を受けて資格を取った感染管理認定看護師です。

当時から認定看護師の重要性は認識されてはいましたが、今回のコロナ禍では手が回らない部分も多かったと、伊藤看護師は振り返ります。

「とにかく認定看護師の育成が急務だと考え、コロナ禍のドタバタの最中でしたが、認定を目指す看護師を当院からごんごん出して、養成していききました。人数が増えたことで病院内外、地域にも貢献できたと思っています」
と伊藤看護師は笑顔でいいます。

結果的に、コロナを通して認定看護師の役割の大きさが再認識されたともいえます。
もちろん、伊藤看護師自身もコロナ禍のまっただ中で戦ってきました。



大浜第一病院の感染管理を担うスタッフ。左から感染管理対策室・事務担当平良可奈子さん、手術室・比嘉義光主任(感染管理認定看護師)、感染管理対策室・松木曜子(感染管理認定看護師)、感染管理対策室室長・知念徹医師、透析室・平良小夏科長(感染管理認定看護師)、感染管理対策室室長代理・伊藤まゆみ科長(感染管理認定看護師)、感染管理対策室・山城美幸主任(感染管理認定看護師)。

「院内研修会を2年間やりまして、12名受講し、そのうち4名の感染管理認定看護師と、1名の手術室認定看護師の育成につなげることができました」

「コロナ禍で認定看護師が増えたのは、そのメンバーが加わったからです。」

「今後もそのようにして感染管理認定看護師を増やしていこうと思っています」

本来は2020年の時に2回目の院内認定看護師育成を行う予定がコロナ禍におわれできなくなったそうです。

「しかし、「コロナ禍も落ち着いたので、しっかりした学習でスキルを身につけさせ、自信を持たせた上で外の研修会に出すというやり方で、新たに育てたい



おもと会のような高齢者施設も多く抱える大きな組織では、感染対策は非常に重要と語る我謝副院長。

ドバックできるようになったことが、今回非常に役立ったと思います」と我謝副院長。「それまではある程度の知識や実績があって、それに当てはめる形でできました。しかし、コロナではそれが通用せず、大変でした」と振り返ります。

「ただ、感染管理認定看護師さんたちは対処法の訓練を受けている。最新情報を集め、それを整理して現場に落とし込む作業をする能力を持っているわけです。そういった面で非常に役に立ってくれました」

また、我謝副院長は基本的に第二病院で治療を行っています。各事業所ではその所属医師や、事業所とタイアップしている嘱託医が対応するので、彼

と思っております」

タテをヨコにして連携を強めていく

「コロナ禍を経て、大きく変わったことがあると伊藤看護師は言います。」

「今まで医療系職能団体はタテ割りのな活動であったように思います。看護協会は看護協会、医師会は医師会、病院は病院、施設は施設、コロナを機にその壁が取っ払われたように思っています。今私たちは行政とも他の医療機関とも連携しているし、ヨコのつながりができています。『連携』がキーワードかなと」

感染をきっかけに組織の壁を越えて互いに連携しないと、大きな有事には対応できないことを実感したということです。

「自分たちの病院だけががんばればいいのではなく、互いに手を取って協力していこうという意識でないと次の新興感染症には対応できません」

「コロナの経験で、行政を含めた横のつながりを念頭に、感染対策の体制を整えていかななくてはならないと強調します。また、おもと会にはそうした

らと連携し、指示を出したり相談に乗ったりするという形の立ち位置にあるといえます。」

ところで担当者会議には玉城看護師も委員として参加しています。

「コロナの時もそうでしたが、各施設の感染者数などの状況を互いに報告しあったり、アドバイスしあったりし、それを現場にフィードバックして治療や感染対策に役立ててもらったりしていますね」と玉城看護師。

「コロナ禍の経験からして今後も新しい感染症の出現が想定されますが、安全感染対策担当者会議はどのように対応していくつもりなのでしょう。我謝副院長は次のように話します。」

「2021年、おもと会の統括本部に安全感染管理室ができたことは、ある意味画期的でした」それ以前から対策者会議はありましたが、事業所で何かあったら我謝副院長らは日常の診療もあるで、すぐに駆けつけられませんでした。安全感染管理室ができてからは、そのスタッフが駆けつけられるようになり、機動性が大幅に向上したというのです。

「現在同室には感染管理認定看護師2人が所属するようになっ

連携のベースがあり、それが今後の感染体制の充実につながる」と伊藤看護師は話します。

「グループ全体にしても病院にしても、第一に掲げる理念がどうあるべきか、その中で互いの連帯、思いやりの精神、それらがベースにないと本当の意味での連携は難しい。互いが軸のブレない理念を自覚して、それに基づいた行動を実践していれば、決して間違った行動にはならないと思うんです。おもと会グループにはそうしたベースがあり、スタッフレベルまで落とされていくので、それが行動変容にまでつながっていると思っております」

さらに伊藤看護師は「感染症は私たちの永遠のテーマ」だといいます。「それを踏まえて次の新興感染症を見通し、どんな感染症にも対応しうる組織体制を、地域全体含めて地道に整えていくことが大きな役割だと考えています。幸い当院では、感染対策に関しては前向きに先駆的に協力的にやっています」

「安全感染対策担当者会議は2012年に発足しました。おもと会は大きな組織なので、安全と感染の対策が今後重要になってくる」と伊藤看護師は話しています。

「安全感染対策担当者会議は2012年に発足しました。おもと会は大きな組織なので、安全と感染の対策が今後重要になってくる」と伊藤看護師は話しています。

たので、今後さらに機動性が向上していくでしょう」

OSMSの育成にも力を入れていきたい

また、統括本部を中心にOSMSの育成にも力を入れているそうです。

OSMSは「おもと会セーフティマネージメントスタッフ」といい、感染管理認定看護師に準ずる役割を果たします。

2024年度からは、制度の改定で県内で感染管理認定看護師の資格を取ることが難しくなります。

それをカバーするためにも看護師や介護スタッフを教育して感染対策のスペシャリストを養成し、各事業所における安全や感染対策の核にしようというものです。

すでに2期生が卒業し、2024年4月からは3期生の養成が始まります。藤田特別顧問の講義もあり、琉大からも講師が来られるそうです。研修内容も充実しているようです。

OSMSを各施設に数人ずつ配置できれば、今後また新興感染症が現れても従来以上に効果

職員が多いので、それが大きな強みです。そうしたいい仲間と、また新しい仲間ともいっしょにできればいいなと思います」

担当者会議にも参加しているふたり

大浜第二病院における感染対策について、同病院安全感染対策室の我謝道弘副院長と、玉城明感染管理認定看護師にお話を聞いてみました。

ただ、我謝副院長はおもと会グループ全体を管轄する安全感染対策担当者会議の委員長も務めており、まずその立場から話していたかったです。

「安全感染対策担当者会議は2012年に発足しました。おもと会は大きな組織なので、安全と感染の対策が今後重要になってくる」と伊藤看護師は話しています。

そこで必要になったのが各施設に特化した安全や感染対策のマニュアルで、これを作るから着手した

的な対応が期待できます。

「おもと会グループの感染対策の体制はかなり整備が進んできましたので、今後は規模拡大よりもスタッフの質の向上に力を入れていきたいと思えますね」と我謝副院長。

「とにかく今回のコロナ禍での感染管理認定看護師の存在は大きかった。たとえ治療には参加しなくても、実際に携わる人の指導・牽引などにおいて果たす役割は絶大なものがありました。認定看護師がいなければさらに大変なことになっていたでしょうね」と強調します。「OSMSを増やすことはもちろんですが、その延長線上で感染管理認定看護師になりたいという希望者が出てくることも期待しています」

第二病院での玉城看護師の感染対策業務

玉城看護師は、ふだんは主に第二病院での感染対策を担当しています。

「大きな役割のひとつとして『職員による感染対策ができていくかをチェックする』というのがあります」と玉城看護師。「たとえばICTラウンドと

そうです。それを実際に運用しながら、問題が出たらそのつど解決するという形でやってきました。」

「感染に関しては本部にふたり、プラス第二病院の玉城看護師、計3名の感染管理認定看護師が対応しています」

感染管理認定看護師養成については前述のように藤田特別顧問らに先見の明がありました。が、それも含めて今回のコロナ禍において担当者会議はどんな役割を果たしたのでしょうか。「まったく新しい感染症で、自分たちは右も左もわからない状況で対応していました。同時に新しく得た情報や現場で起きたことに関する分析を行って、対処方法等を随時各施設にフィード



安全感染対策担当者会議の委員長も務める大浜第二病院の我謝道弘副院長(右)と、同会議の委員でもある玉城明看護師。

いって、月に一回院内を回り、手洗いや消毒、個人用防護具などにおいて感染対策がしっかりとできているかなどを確認し、指摘も行っていきます」

また、今後の取り組みとして、手指衛生の遵守率の確認をするために、各病棟のOSMSメンバーといっしょに月に一度各部署を回ってチェックするといいます。そして統計を取って、その結果を現場にフィードバックするそうです。

「みなさん手洗いがよくできていますとか、今回はあまりできていないので、もっとしっかりとやりましょうとか、声かけするようにします」

さらなる感染対策の充実を目指して、現場でも地道に努力していることがよくわかりました。

玉城さんは感染管理認定看護師として大浜第二病院の現場で感染対策に力を尽くしています。



54の施設・事業所の
感染対策を一手に担う

藤田特別顧問や我謝大浜第二病院副院長が言及していた統括本部・安全感染管理室には、現在看護師3名が所属しています。

その3名、認定看護管理者の加治木選江室長、主任の與那恵美および山城奈奈両感染管理認定看護師に、同室の役割や業務内容について聞いてみました。

「大浜第一と第二病院にはそれぞれ独立した感染管理対策室がありますので、私たちは病院以外の学校も含めた施設・事業所を担当しています」と加治木室長が説明します。

ちなみに藤田特別顧問や我謝副院長もサポートしてくれるそうです。



統括本部・安全感染管理室のスタッフ。左から山城奈奈看護師、加治木選江室長、事務担当嘉陽朋子さん、與那恵美看護師。



加治木室長は認定看護管理者として主に安全管理面を担当しつつ、感染対策も支援します。



與那主任は感染管理認定看護師として、病院を除くおもと会グループ全施設・事業所の感染対策を担当しています。



山城さんも感染管理認定看護師。実はおもと会に入職してまだ半年ですが、管理室の機動性強化に大きく貢献しています。

「朝は感染管理認定看護師が高齢者施設入所者全員のケアカルテをレビューします。熱が出ていないかなどをチェックして未対応なら電話での確認もします」

入所者全員は大変かと思われる。しかし「システムが優れているので大丈夫ですよ」と加治木室長は笑顔でいいます。

「コロナ等の感染者が出たらその施設からすぐに報告が来ます。二人は休日でも可能な限り現場に向かいます」

2023年に山城看護師が加わったことで体制が充実し機動力・実践力がかなり上がったといえます。

「そうした感染対応と、現場の安全感染対策を担うスタッフの養成にも力を入れています」これは大浜第二病院のパートで、集合教育と現場OJTの両方を與那・山城両看護師が中心となって実施しています。

ラウンドも定期・臨時で行います。他の施設の管理者やOSMSのメンバーも一緒に参加して安全や感染面から評価し、改善を推進しています。経管栄養の感染リスク評価なども入っているそうです。

学会誌に論文を
発表するほどのレベル

感染対策については論文も発表されています。

2023年に「沖縄県の特別養護老人ホームで発生した超高齢者を中心としたCOVID-19の臨床像」(藤田次郎、與那恵美、知念徹、伊藤まゆみ、加治木選江)が日本環境感染学会誌に掲載されたことは、おもと会の感染対策のレベルの高さを示しているといえます。「現場で対策が不十分な場合、指導する立場だと」

統括本部おもと会安全感染管理室

うして欲しい、こうして下さい」とルールややるべき姿を求めることが多くありますが、彼女たちは現場の困難な状況や理由を聞き出し、いっしょに対策を立てます。そういった二人の姿勢もあり「あ、来てくれた」と感染症が発生した時には特に喜ばれ、安心するという声も聞きます。また、このような現場からの声が二人の励みになっています。

こうしたベースもあり、コロナ禍の経験を通して現場スタッフと共に感染対策を行うことができ、現在では各施設が自立して対策を立てています。

「今後も各施設と連携して支援していきたいと思っています」

さらに、おもと会における連携体制はコロナ禍においても有効に機能したといえます。

「おもと会には病院とクリニックが計3つあり各先生方のおかげで迅速な診断と治療が可能となっています」

藤田特別顧問もコロナに関しては速やかな治療が力だったと話していましたが、その背景に施設と病院の連携体制があったことがわかります。

今回の特集で7名の医療スタッフのお話をうかがい、おもと会の感染対策はこれからさらに強化され、今後予想される新興感染症に対しても有効に機能すると確信しました。なかでも最大のポイントは人材育成にあると思われれます。

「感染管理認定看護師は他の看護師と違い、感染に関して高度な知識やスキルを有しており、それを背景に各施設、各個人に合った指導もできるという強みがあります」と加治木室長がいうように、今後も感染管理認定看護師が感染対策のカギを握っていくようです。

真似っこに繋がる身体・運動・遊び

空き時間にできる
お手軽
健康体操
08

「真似っこが子どもの発達に大切」と聞いたことがある方も多いかもしれません。子どもは新生児の頃から**模倣(真似っこ)**する基本的な能力があると考えられています。ただ、なんでもかんでも真似っこできるわけではありません。模倣の力は「自分の経験がもととなりはたらく」という学者もいます。いいかえると、自分の経験が培われると、他人の行動に反応ができ、模倣する力が伸びるということになります。そのため、模倣は**社会性**や**ことばの発達**に大きく関係していると考えられています。

今回は、真似っこに繋がる前段階として、自分の身体や運動を知る遊びを紹介したいと思います。

① 蜘蛛の巣くぐり ~気分はスパイ!異にハマるな!~

自分の体を意識してロープに当たらないように気をつけよう。

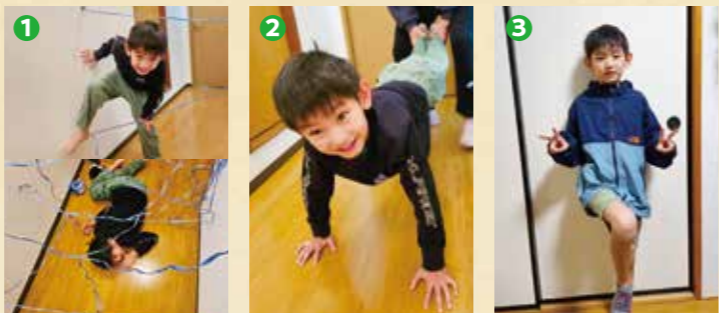
② 手押し車 ~筋肉ムキムキマッチョになろう!~

体を支えることで体に意識を向けよう。

③ ポーズ真似っこ

~カッコいいポーズを真似してぼっち決めよう!~

相手の体と自分の体を意識して動作を真似しよう。



最後に
このような遊びを通じて親子のコミュニケーションにも繋がればと考えます。また、成功した時には「どうやったらできたの?」と聞くと、より効果的です。注意点としてこの活動において**成功**は求めていません。**経験**を大切にしてください。できない時には「もう少しだったね」と励まし、子どもの**活動意欲**を伸ばすようにすることが重要です。

沖縄リハビリテーション福祉学院 言語聴覚学科 専任教員 小渡祐佑

福祉用具の紹介 靴・リハビリシューズ

今回紹介するのは、日常生活に欠かせないリハビリシューズ(介護用靴)です。

加齢により身体機能が低下すると、筋力の衰えや膝の痛みなどにより、歩くことが難しくなります。また、足に合わない靴を履き続けると、外反母趾、捻挫、つまずきなどの要因となり、歩行の負担が増えることが増えてきます。負担を軽くし、快適に歩行できるようサポートするのがリハビリシューズです。

リハビリシューズは、開口部が広く柔らかな素材で作られているものが多く、マジックテープやファスナーを備え、簡単に履いたり脱いだりできるように工夫されています。また、足の形状に合わせて簡単に固定が可能なので、むくみが出やすい方、装具を着用している方でも使用できます。足の長さが左右で違う方は、片方の靴底の高さを調整すれば、左右の高さを合わせることもできます。さらに、下肢装着用の方も、片方のみのサイズ変更や片方だけの購入も可能なので、左右同じサイズの靴を履くことが難しい方にも適しています。

リハビリシューズは、幅や甲の高さなどが足に合っているかが重要です。サイズが合っていないと指を痛めたり、靴の中で足が滑って転倒する危険があります。足長(かかとからつま先までの長さ)・足幅(足幅のもっとも広い部分の長さ)・足囲(足幅の周りの寸法の長さ)を測ることで、サイズ選びができる靴もあります。

初めて購入する方には事前の試し履きをおすすめします。



くわしくは福祉用具専門相談員へご相談ください。

福祉用具貸与サービスステーションすみれ

お問い合わせ先

福祉用具サービスステーションおもと園

〒902-0064那覇市寄宮1-16-12
ケア・クロッシング寄宮1階

TEL.098-833-1555 FAX.098-833-1516

福祉用具貸与サービスステーションすみれ

〒901-0215
豊見城市字渡嘉敷150番地

TEL.098-851-0101 FAX.098-851-0200



おもと四季探訪

vol.23

オオムラサキシキブ

ぎのわんおもと園 環境整備課 伊佐 真淳



分類: シソ科ムラサキシキブ属
分布・生育地: 本州、四国、九州、沖縄
花: 淡紫色で初夏~秋開花
海岸近くの林縁の明るい場所
果実: 球形で径約4~6mm、紫色に熟す

平安時代に「源氏物語」を書いた作家、紫式部をご存じだと思います。ぎのわんおもと園内の植物群の中にも「オオムラサキシキブ」の名の樹木が自生しています。

本州に広く分布している「ムラサキシキブ」より大型のため、沖縄に生息するものを「オオムラサキシキブ」と明記、変種とされています。

利用者の方が歩行訓練する坂道(赤橋付近)に種子から自然に生えてきて、土手の護岸ブロック側に自生しています。花や実がつかないとそのまま通り過ぎてしまいそうな低木樹木です。淡紫色の小さい花を夏頃にたくさんつけます。冬に向けて冷え込んでくると、紫の小粒の実が目につきます。「ムラサキシキブ」の名所、京都では重なり合った紫色の実を「紫重実(ムラサキシキミ)」と呼び、作家の紫式部が名前の由来との説もあります。

オオムラサキシキブは一見すると雑木にも見えますが、夏には小さいながらも鮮やかな花を咲かせ、冬には美しい紫色の実をつける、見る人を楽しませてくれる樹木です。